この人に聴く ～仙川の昔と今、そして明日～ ＜第３回＞

まちの防災に備える

田中 次郎さん（たなか・じろう／緑ヶ丘・仙川まちづくり協議会 会長／調布フラワーガーデン 代表）

> 仙川の記憶をたどる連載「この人に聴く」。第3回は、緑ヶ丘・仙川まちづくり協議会の会長を二十年近く務める田中次郎さん（78）。田んぼと雑木林に囲まれた下仙川「向山」に生まれ、トラックの運転手、コピー機の技術者を経て、造園業「調布フラワーガーデン」を営む。地域をどう束ね、災害にどう備えるか――まちづくりの現場に立ち続ける人の、率直な言葉を聴いた。取材は2026年10月6日、Share Nest 仙川で行った。

田中次郎さんが生まれたのは昭和23（1948）年の3月。いまの地名でいう緑ヶ丘のあたり、当時は**北多摩郡神代村・下仙川**と呼ばれた土地だった。駅の方向から見た場合、田圃（たんぼ）を超えた小高い山なので「**向い山（むけえやま）**」とも呼ばれたそうだ。旧甲州街道を新宿に向かい、左に曲がって入る細い道の先に、本家と田中さんの家があった。周りに農家が八軒ほど。一面の田んぼと雑木林の、のどかな村の風景が、田中さんの原風景である。



令和7年10月、緑ヶ丘・仙川まちづくり協議会が調布市表彰を受けた。多年にわたる社会福祉活動が認められたもの。表彰状を手にする会長の田中次郎さん。

ヤギの乳で育った子

実は田中さんは、かなりの未熟児で生まれた。保健所からは「この子は育たない」とまで言われたという。母の乳が出ず、代わりに飲んで育ったのが**ヤギの乳**だった。近くの親戚の家でヤギを飼っていて、その乳を分けてもらったのだ。「それで、なんとか育ちました」と田中さんは笑う。

当時の仙川は、川沿いが一面の田んぼ。夏になれば蛍が飛び、ドジョウやウナギ、タナゴがいた。土地の半分以上は雑木林で、春には金蘭（きんらん）・銀蘭（ぎんらん）が咲いた。春蘭のことを、このあたりでは「ジジババ」と呼んだという。農業はすべて手と鍬（くわ）の仕事で、機械などない時代。広い畑は耕せず、だからこそ雑木林が多く残っていた。

滝坂へ通う道

小学校は**滝坂小学校**。甲州街道をずっと歩いて通った。裕福な家の子は電車で通ったりもしたが、田中さんは毎日が徒歩。行き帰りの道草が、少年にとっては何よりの楽しみだった。滝坂の坂を登ったところには、風呂桶をつくる桶屋があり、その仕事ぶりを飽きずに眺めた。近くでは鍋屋さんが、炭の粉を

丸めて固める「**炭団（たどん）**」をつくっていた。火持ちがよく、長時間燃焼させるのに使うものだ。二つのお椀のような型で、ぽん、ぽんと手際よく仕上げていく。その手元にも、少年は見入った。

いまの小田急バスの営業所のあたりには「**丸仙市場**」という市場があった（現在のルネッサンスのあたり）。もう少し新宿寄りには鍛冶屋があり、鍬や鎌などを打っていた。店先に並ぶ道具や、職人の手仕事の数々。まちのあちこちに、暮らしを支える小さな生業（なりわい）が息づいていた。

桜金属工業と萬平製作所 —— 軍需工場の記憶

いまの「いなげや」のある場所には、かつて**桜金属工業**という会社があった。その隣が**萬平製作所**。桜金属工業は、戦中は軍需のどこかの下請けをしていたのではないか、と田中さんは記憶をたどる。三鷹大沢の中島飛行機研究所をはじめ、この一帯には軍事にかかわる工場が点在していた。戦後、それらの跡地が、次の時代の暮らしを担う、民生品の工場へと姿を変えていく。

八幡神社のお祭りも、よく覚えている。いまはカラオケや、桐朋学園の生徒による演奏、子どもたちのダンスなどが中心だが、昔は村芝居が各神社を代わりばんこに巡っていた。神社の境内は、まちの人々が季節ごとに集う、晴れの舞台だった。

トラックから、コピー機、そして植木へ

高校を出て、田中さんがまず就いたのはトラックの運転手の仕事だった。しかし、子どもの幼稚園の書類の職業欄に「運転手」と書くのがどうにも嫌で、別の道を探す。折しもコピー機が世に出始めた頃。エンジニアの募集があると聞いて飛び込み、キヤノンの研修センターで1ヵ月、トランジスタの基礎から機械の仕組みまで徹底的に学んだ。基板が一枚ずつ見えていた時代、故障した部品を一つひとつ探して取り替える——そんな技術者だった。やがてオフィスコンピューターの販売も手がけるようになる。

転機は三十歳。父が亡くなり、田中さんは家業を継ぐ決心をする。父は明治28年の生まれ、田中さんは五十五歳のときの子だった。継いだのは**貸し植木**の仕事。これから流行るだろうと見込んで、「**調布フラワーガーデン**」と名づけた。やがて「ついでに庭木も切ってくれないか」という声が増え、近くで引退する年配の植木屋に教わりながら、三十代半ばから造園の道へと深く入っていく。

営業には苦手意識もあった。だが、ある印刷会社の社長にかけられた一言が、田中さんを支えた。「営業は能弁じゃなくていいんだ。お前でいいんだから」。**誠意だよ、誠意**——その言葉が、自信になった。木と向き合い、客と誠実に向き合う。それが田中さんの流儀になった。

まちづくり協議会の二十年

会社を辞めて自営を始めた頃、田中さんが地域活動の入り口に選んだのが**仙川青友会**だった。農家と商店の若者たちのつながりを大切にする会で、地域の行事を企画し、折々に活動をともにした。やがて田中さんは、小学校区ごとに置かれた「**地区協議会**（まちづくり協議会）」の活動へと軸足を移していく。

調布市内二十の小学校区に十九もの協議会がある。そのうちの一つ、緑ヶ丘・仙川エリアの会長を、田中さんは**二十年近く**、三代目として務めてきた。



仙川の川面いっぱいに泳ぐ鯉のぼり。まちづくり協議会が毎年、約千六百匹を飾る。今年はその上に、大きな虹がかかった。写真提供：田中次郎さん

いま力を入れているのが、仙川の川に**鯉のぼりを千六百匹ほど泳がせる**催しだ。宅添橋のあたりを舞台に、保育園や小学校の子どもたちが絵付けした鯉が、春の空いっぱいにはためく。今年は、その鯉のぼりの上に大きな虹がかかった。「あれは、きれいでしたよ」。木を手入れすることから始まった人生が、いつしかまちそのものを彩る仕事になっていた。

協議会が生まれたのは平成13（2001）年。「心温まるぬくもりと、活力ある豊かな地域社会を」を掲げ、緑ヶ丘小学校の区域を中心に、地域の連帯と助け合いを育んできた。その活動は、一年を通して途切れることがない。三月には**桜まつり**。緑ヶ丘小学校の校庭に、団子や焼きそばの屋台が並び、太鼓やダンスでにぎわう。五月には鯉のぼり流し。さらに、歌を囲んでひとときを過ごす**緑ヶ丘うたごえサロン**、秋の**地域防災訓練**、防犯の取り組み、コンサートや環境活動まで――。「年中、何かしら動いていますよ」と田中さんは笑う。定例の運営委員会や役員会も、月替わりで欠かさず開く。こうした一つひとつの積み重ねが、いざというときに顔の見える関係を、まちに編んでいく。

備えるまち ―― 災害にどう向き合うか

まちづくり協議会が生まれた本来のねらいは、**避難所の運営**にある、と田中さんは語る。自治会は緑ヶ丘だけでも五つ、仙川には一つ（仙川・緑ケ丘・若葉町親和会）ある。いざ災害というとき、学校に避難所を開設しても、自治会ごとではばらばらで動きにくい。それを束ねる組織が必要だった。台風十九号で多摩川の氾濫が心配されたときには、川に近い人々が高台のある避難所に避難してきた。そのとき改めて、備えの大切さを実感したという。

避難所の現実は、思うほど甘くない。一人あたりのスペースは、二メートル四方のブルーシートに三人ほど。緑ヶ丘小学校で収容できるのは、せいぜい六十四区画。「キャパオーバーだから帰ってください、とは言えない」。しかも、早く来るのは体の動く若い人で、お年寄りや体の不自由な人は後から来る。その現実にどう向き合うか、答えはまだ出ていない。防災倉庫はコンテナで二つ、備蓄は数日分。「緑ヶ丘は二十メートル先が三鷹です。よその地域の子だからと、分けないなんてことはしない。お互いさまなんだから」。

田中さんが繰り返し説くのが、**在宅避難**の大切さだ。避難所にマンホールトイレができても、下水管が壊れていれば流せない。家が無事なら、簡易トイレと凝固剤を使いながら、自宅で過ごすほうがいい。

「家が壊れていないからと、水洗トイレを使ってはいけない。下水が詰まっていたら、坂の下の家で溢れてしまう。みんな、案外知らないんです」。

水害についても、田中さんの見立ては冷静だ。仙川や野川の水位は世田谷の鎌田橋のあたりで計測され、その数値で警報が出る。だが仙川の上流は小金井。普段の水はほとんどない。昔は畑や林が雨を地面に吸い込んでくれたが、いまは住宅と舗装路ばかりで、雨はそのまま川へ流れ込む。「三鷹の上のほうで降ると、仙川があふれる」。まちの形が変われば、水の流れも変わる。

街のこれから、そして若い世代へ

これからの緑ヶ丘に欲しいものは、と尋ねると、まず挙がったのが**スポーツ施設**だった。テニスコートはあるが、ほかにない。高齢化が進むなか、仙川駅から緑ヶ丘を循環するコミュニティバスを、もっと西部まで延ばしてほしいとも願う。

まちに増えてほしい店は、と聞けば、返ってきたのは「**街中華**」。チェーン店ではない、昔ながらの中華屋さん。そして、ピアノが流れる、ふらりと立ち寄って楽しい店。いろいろ見て回れる場所が、もっとあればいい。

最後に、若い世代へのメッセージを求めると、田中さんはこう語った。「若い人に、もっと地域活動に参加してほしい。でも、ただ参加してくださいと言っても来ない。参加したくても、最初の一歩の踏み出し方が分からないんだと思う」。そして、こうも付け加えた。「年寄りがいつも出しゃばっているから、若い人が入ってこないのかもしれません」。束ねる立場に二十年立ち続けた人の言葉だからこそ、その一言には重みがあった。まちを次の世代へ手渡すために、何ができるか。田中さんの問いかけは、この街に暮らす私たちみんなへのものだ。

田中 次郎（たなか・じろう）さん

昭和23（1948）年3月、北多摩郡神代村・下仙川「向山」（現在の緑ヶ丘周辺）に生まれる。トラックの運転手、キヤノンのコピー機技術者、オフィスコンピューターの販売などを経て、30歳で家業を継ぎ造園業「調布フラワーガーデン」を営む。仙川青友会を経て、緑ヶ丘・仙川まちづくり協議会の会長を三代目として約20年務める。仙川の鯉のぼり（約1600匹）をはじめ、防災・防犯・環境・地域交流の活動に幅広く携わる。

監修　せんがわまちニティ情報センター／青野 友太郎
取材・編集　株式会社SHARE NEST／代表取締役　大柳 勝、スタッフ　伊集 琉晟
取材日　2026年10月6日（Share Nest 仙川）
制作協力　生成AI（Claude）

※制作方法：インタビュー音源のAIによる文字起こしと、生成AIによる構成案をもとに、編集部（株式会社SHARE NEST）が編集を行いました。掲載にあたっては、せんがわまちニティ情報センターの監修と、ご本人の確認をいただきます。